

森林インストラクターによる教材研究—1枚の写真を通して

マングローブが津波を防いだ

作成：久保田鷹光（くぼた たかみつ／森林インストラクター）

寸評：山下宏文（やました ひろぶみ／京都教育大学 教授）*



◀沖縄県西表島のマングローブ林

語り：「昨年（平成16年）末にインド洋津波が発生し、多数の人々が亡くなりました。ところが、ペナン州（マレーシア）のいくつかの漁村では、マングローブ林のおかげで、被害が最小限で済んだそうです。では、このマングローブ林とはどんなものでしょうか。主な特徴を挙げると、熱帯や亜熱帯地方に生育する植物で、川の河口近くの真水と海水が混じり合うような場所に生育する植物だということです。世界では100以上の種類があります。

日本では、沖縄や奄美大島などが亜熱帯気候に属し、ヤエヤマヒルギ、オヒルギ、メヒルギなど

のマングローブが観察できます。マングローブ林は、津波や風を防ぎ、また、魚やエビなどの小さな生物を守り育てる重要な場所です。外国では、その木材が、家や船、薪や木炭の材料として利用されています。しかし、世界のマングローブ林はこの100年の間、人によって切り倒され、半分以下の面積になっているとのこと。

今回のインド洋津波の経験からもマングローブ林の効用が見直され、さらに、世界中の人々にその大切さがわかってもらえたのではないのでしょうか。」

意図（久保田）：「マングローブ」という言葉が最近、テレビや新聞紙上によく出てくる。一方、マングローブの分布が熱帯・亜熱帯ということもあり、九州以北の人々にはなじみが薄い。しかし、ヤエヤマヒルギの支柱根、オヒルギの膝根や胎生種子などの姿・形は面白く、子どもの興味・関心を引きつける教材となると考える。

寸評（山下）：今回は、森林インストラクターの立場から対象学年や学習単位にとらわれずに教材を作成してもらった。内容的には、小学校第5学年の「森林資源の働き」や中学校の地理的分野などで活用できよう。「森林」というとどうしても「山」のほうへと視線が向かうが、「海」のほうへも視線を向けていくことが必要である。このマングローブの教材を通して、海岸林や魚つき林などの重要性にも、子どもの関心を向けていくことが期待できるのではないだろうか。